

は一意的な解  $\mathbf{y}^* = (\bar{\mathbf{A}}^T \bar{\mathbf{A}})^{-1} \bar{\mathbf{A}}^T \mathbf{b} \in \mathbb{R}^r$  を持つ。しかし、線形方程式系

$$\sum_{j=1}^q \mathbf{a}_j x_j = \mathbf{c}$$

の解は一意的ではない。したがって、誤差  $\left\| \sum_{j=1}^q \mathbf{a}_j x_j - \mathbf{b} \right\|$  を最小にする  $\mathbf{x}$  は一意的ではないが、 $\mathbf{x}^* = (y_1^*, y_2^*, \dots, y_r^*, 0, \dots, 0)^T \in \mathbb{R}^q$  はその解の一つである。

注意：  $\mathbf{b} \notin S$  の  $S$  への直交射影  $\mathbf{c}$  は一意的に定まるが、 $\mathbf{c}$  を  $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_q$  の線形結合で表すのが一意的に定まらないということである。

## 9 部分空間の演算 (直和)

$\mathbb{R}^n$  の 2 つの部分空間  $S$  と  $T$  に対して、次の演算

$$S + T := \{\mathbf{x} + \mathbf{y} \in \mathbb{R}^n \mid \mathbf{x} \in S, \mathbf{y} \in T\}$$

を定義する。また、 $S$  と  $T$  が条件

$$S \cap T = \{\mathbf{0}\}$$

を満たすとき、これらの部分空間は独立であるという。つまりこの場合、 $S + T$  を  $S$  と  $T$  の直和といい、 $S \oplus T$  で表す (直交していなくても良い)。図 19 参照。

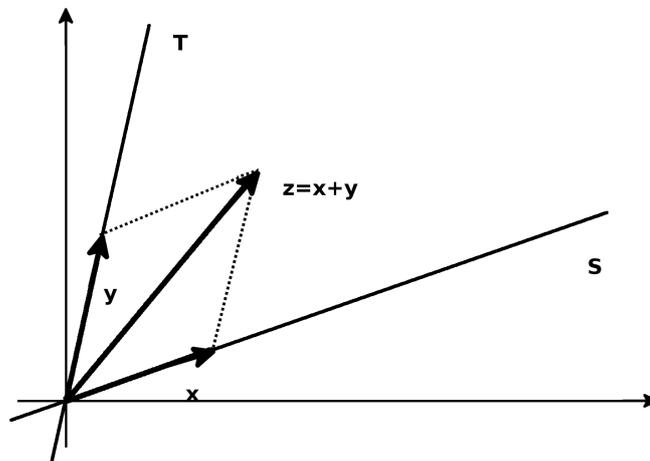


図 19: 部分空間  $S$  と  $T$  の直和：  $\mathbb{R}^2 = S \oplus T$  .

[問題 09-01]  $\mathbb{R}^n$  の 2 つの部分空間  $S$  と  $T$  に対して、 $S + T$  および  $S \cap T$  は部分空間になることを証明せよ。

定理 9.1 :  $\mathbb{R}^n$  の 2 つの部分空間  $S$  と  $T$  が独立であるとき , つまり  $S \cap T = \{0\}$  であるとき ,

(a)  $\forall z \in S \oplus T$  は  $z = x + y$  ,  $x \in S$  ,  $y \in T$  として一意的に表現できる .

(b)  $\dim(S \oplus T) = \dim(S) + \dim(T)$  .

[問題 09-02]  $S$  と  $T$  を  $\mathbb{R}^n$  の 2 つの独立な部分空間とする ( つまり  $S \cap T = \{0\}$  ) . このとき , 以下の (a) と (b) を説明せよ .

(a)  $\forall z \in S \oplus T$  は  $z = x + y$  ,  $x \in S$  ,  $y \in T$  として一意的に表現できる .

(b)  $\dim(S \oplus T) = \dim(S) + \dim(T)$  .

また  $S$  と  $T$  が独立でない場合は (a) と (b) が成立しない例を示せ .

定理 9.2 (次元の公式) :  $S, T$  を  $\mathbb{R}^n$  の部分空間とすると以下が成り立つ .

$$\dim(S + T) = \dim(S) + \dim(T) - \dim(S \cap T).$$

定理 9.3 :  $S$  を  $\mathbb{R}^n$  の  $p$  次元部分空間 ,  $T$  を  $\mathbb{R}^n$  の  $q$  次元部分空間 ,  $T \subseteq S$  とする . このとき , 条件

$$S = T \oplus U$$

を満たす  $p - q$  次元部分空間  $U$  が存在する ( 直和分解 , 直交してなくてもよい ) .

[問題 09-03]  $S$  を  $\mathbb{R}^n$  の  $p$  次元部分空間 ,  $T$  を  $\mathbb{R}^n$  の  $q$  次元部分空間 ,  $T \subseteq S$  とする . このとき , 条件

$$S = T \oplus U$$

を満たす  $p - q$  次元部分空間  $U$  が存在する .

( ヒント :  $S$  と  $U$  は直交してなくてもよい . )

定理 9.4 :  $S \subseteq \mathbb{R}^n$  を  $p$  次元部分空間 ,  $S^\perp$  をその直交補空間とすると

$$\mathbb{R}^n = S \oplus S^\perp \text{ . (直交分解)}$$

証明 :  $S$  の正規直交基底を  $a_1, a_2, \dots, a_p$  とする .  $S$  は  $\mathbb{R}^n$  の部分空間であるので ,  $a_1, a_2, \dots, a_p$  は  $\mathbb{R}^n$  の基底でもあり , さらに  $a_1, a_2, \dots, a_p, a_{p+1}, \dots, a_n$  が  $\mathbb{R}^n$  の基底となるように  $a_{p+1}, a_{p+2}, \dots, a_n$  をとることができる .  $a_1, a_2, \dots, a_p, a_{p+1}, \dots, a_n$  にシュミットの正規直交化法を施すと ,  $\mathbb{R}^n$  の正規直交基底  $a_1, a_2, \dots, a_p, a'_{p+1}, \dots, a'_n$  が得られる . よって  $S = \text{span}(\{a_1, a_2, \dots, a_p\})$  ,  $S^\perp \supseteq \text{span}(\{a'_{p+1}, a'_{p+2}, \dots, a'_n\})$  である . しかし ,  $a_1, a_2, \dots, a_p, a'_{p+1}, \dots, a'_n$  が  $\mathbb{R}^n$  の基底であるので , もし  $S^\perp$  が真に  $\text{span}(\{a'_{p+1}, a'_{p+2}, \dots, a'_n\})$  を含むとしたら  $S^\perp \cap S = \{0\}$  でなくなるので , 結局  $S^\perp = \text{span}(\{a'_{p+1}, a'_{p+2}, \dots, a'_n\})$  となる .  $\square$

系 9.5 :  $S$  を  $\mathbb{R}^n$  の部分空間であるとしたとき , つまり ,

$$\dim(S) + \dim(S^\perp) = n \text{ .}$$

[問題 09-04]  $A \in \mathbb{R}^{m \times n}$  の核は  $A$  の行空間の直交補空間になっていることを示せ .

系 9.6 :  $A \in \mathbb{R}^{m \times n}$  とすると,  $\text{rank}(A) + \dim(\text{核}) = n$  .

部分空間  $S$  の直交分解を実現するには,  $S$  の基底を  $a_1, a_2, \dots, a_p$  としたとき,  $A = (a_1 \ a_2 \ \dots \ a_p)$  とまずおく. すると

$$S = \{Ay \in \mathbb{R}^n \mid y \in \mathbb{R}^p\} \quad (A \text{ の列空間})$$

$$S^\perp = \{z \in \mathbb{R}^n \mid A^T z = 0\} \quad (A^T \text{ の核})$$

と定義しておく.

$u \in \mathbb{R}^n$  を

$$u = x + w, \quad x \in S, \quad w \in S^\perp$$

と表現するには,  $u$  の  $S$  上の直交射影を  $x$  ととり,  $w = u - x$  とすればよい. すなわち,

$$x = A(A^T A)^{-1} A^T u,$$

$$w = u - x = (I - A(A^T A)^{-1} A^T) u$$

である.  $A(A^T A)^{-1} A^T$  は  $S$  への直交射影行列,  $I - A(A^T A)^{-1} A^T$  は  $S^\perp$  への直交射影行列となる.

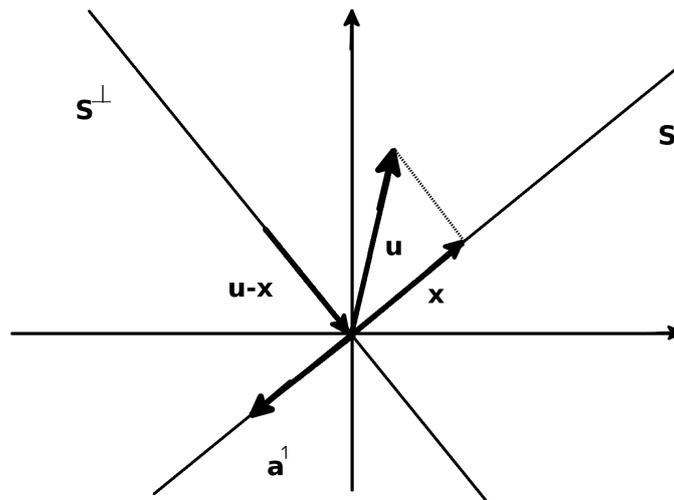


図 20:  $\mathbb{R}^2$  を  $S = \text{span}(a_1)$  と  $S^\perp$  に分解した図.  $u \in \mathbb{R}^2$ ,  $x \in S$  である.

[問題 09-05]  $S$  を  $n$  次元 Euclid 空間  $\mathbb{R}^n$  の部分空間,  $b \in \mathbb{R}^n$  とする.  $c \in S$  が任意の  $a \in S$  に対して条件  $\|b - a\| \geq \|b - c\|$  を満たすとき,  $c \in S$  を  $b$  の  $S$  上への直交射影と呼ぶ.

- $c \in S$  が  $b$  の  $S$  上への直交射影であるための必要十分条件は, 任意の  $a \in S$  に対して  $(b - c)^T (a - c) \leq 0$  が成立することであることを証明せよ.
- $b$  の  $S$  上への直交射影は高々 1 つであることを証明せよ.
- $S$  の正規直交基底を  $a_1, a_2, \dots, a_r$  とする. このとき,  $a_1, a_2, \dots, a_r$  を用いて  $b$  の  $S$  上への直交射影を表せ.

[問題 09-06]

- (a)  $n$  次元 Euclid 空間  $\mathbb{R}^n$  の部分集合  $S$  が部分空間であることの定義を述べよ .
- (b)  $S$  を  $n$  次元 Euclid 空間  $\mathbb{R}^n$  の部分空間であるとする .  $S$  の次元および基底の定義を述べよ .
- (c)  $V$  と  $W$  を  $n$  次元 Euclid 空間  $\mathbb{R}^n$  の部分空間とし ,

$$U = \{v + w \mid v \in V, w \in W\}$$

とする . このとき ,  $U$  は  $V$  と  $W$  を含む  $\mathbb{R}^n$  の (集合の包含関係の意味で) 最小の部分空間となることを示せ .

- (d) (c) に加え ,  $V \cap W = \{0\}$  を仮定する . このとき ,  $v_1, v_2, \dots, v_k$  を  $V$  の基底 ,  $w_1, w_2, \dots, w_m$  を  $W$  の基底とすると ,  $v_1, v_2, \dots, v_k, w_1, w_2, \dots, w_m$  は  $U$  の基底となることを示せ .

## 10 2 次形式と固有値

### 10.1 1 変数の場合

$f: \mathbb{R} \rightarrow \mathbb{R}$  を 2 階連続微分可能な関数とする .

$$\begin{aligned} x^* \text{ が } f \text{ の極小点} &\Rightarrow f'(x^*) = 0, \quad f''(x^*) \geq 0, \\ x^* \text{ が } f \text{ の極小点} &\Leftarrow f'(x^*) = 0, \quad f''(x^*) > 0, \end{aligned}$$

ただし , ここで  $x^*$  が  $f$  の 極小点 とは , この点に対してある  $\varepsilon > 0$  が存在し ,

$$f(x^*) \leq f(x) \text{ が任意の } x \in \{x' \in \mathbb{R} \mid |x' - x^*| < \varepsilon\} \text{ に対して成り立つものである .}$$

これらの証明をするためには ,  $f$  を点  $x^*$  において 2 階まで Taylor 展開をする .

$$f(x) = f(x^*) + f'(x^*)(x - x^*) + \frac{1}{2}f''(x^*)(x - x^*)^2 + o(|x - x^*|^2)$$

ただし ,  $o(0) = 0, \lim_{r \rightarrow 0} \frac{o(r)}{r} = 0$  である .

この議論を 2 変数以上の場合において考える . つまり  $f: \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}$  を 2 階連続微分可能な関数とする .

$$\begin{aligned} f'(x^*) &\text{ は } n \text{ 次元のベクトル} \\ f''(x^*) &\text{ は } n \times n \text{ 対称行列} \end{aligned}$$

となり ,  $\frac{1}{2}f''(x^*)(x - x^*)^2$  に相当する部分は  $x$  に対する 2 次形式となる . さらに ,  $f''(x^*) > 0$  ( $f''(x^*) \geq 0$ ) という条件は

$$\begin{aligned} f''(x^*) &\text{ は正定値 (半正定値) 行列} \\ &\Updownarrow \\ f''(x^*) &\text{ の全ての固有値は正 (非負)} \end{aligned}$$

となる .